

事業区分	経常研究(応用)	研究期間	平成23年度～平成26年度	評価区分	事前評価
研究テーマ名	大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術の開発				
(副題)	(諫早湾干拓地の大規模露地野菜圃場における環境にやさしい病害虫管理技術の開発)				
主管の機関・科(研究室)名	研究代表者名	農林技術開発センター・病害虫研究室			寺本 健

<県長期構想等での位置づけ>

長崎県総合計画	2. 産業が輝く長崎県 (4)力強く豊かな農林水産業を育てる ①「ナガサキブランド」の確立 ⑦基盤技術の向上につながる研究開発
新科学技術振興ビジョン	(3)地域資源活用プログラム グリーンイノベーション (3)環境保全プログラム
ながさき農林業・農山村活性化計画	I. 農林業を継承できる経営体の増大 2. 業として成り立つ所得の確保 ・生産コストの低減による農林業者の所得向上 II. 豊かな資源を活用した農山村の活性化 3. 農山村から始める環境への配慮 ・環境に配慮したながさき農林業の推進

1 研究の概要(100 文字)

<p>実用技術開発事業「諫早湾干拓地における環境保全型大規模生産技術体系の構築」で得られた成果^{*1}を基に、新たな環境負荷低減技術を組み合わせ、大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術を開発する。</p>	
研究項目 ^{*4}	<p>①土着天敵の温存・増殖植物^{*2}を利用した防除効果の評価</p> <p>②性フェロモン剤^{*3}と黄色灯を組み合わせたチョウ目害虫に対する防除効果の評価</p> <p>③バレイショ疫病初発期予察モデルを利用した減農薬防除技術の確立</p>

2 研究の必要性

1) 社会的・経済的背景及びニーズ	<p>平成20年から開始された諫早湾干拓地における営農は環境保全型農業の実践が命題となっており、生産者は施肥・病害虫防除の両面でこの命題に取り組んでいる。しかし、1区画6ha という大区画圃場は生産コスト削減等でスケールメリットが得られる反面、病害虫防除に関しては多大な労力が必要であり、これを支援する病害虫管理技術の確立は緊要である。</p>
2) 国、他県、市町、民間での実施の状況または実施の可能性	<p>近年、生物多様性に関する試験研究は国、他県で実施されているが、本試験のような大区画圃場における試験研究は実施されていない。また、諫早湾干拓地のような大区画圃場は全国的にも稀であり、他の研究項目においても同様な試験事例およびその可能性はない。</p>

3 効率性(研究項目と内容・方法)

研究項目	研究内容・方法	活動指標	H				単位	
			23	24	25	26		
①	1) 土着天敵温存・増殖植物による緑地帯および栽培作物における生物種の発生状況解明	調査対象植物、作物数	目標	3	3	3	3	種類
			実績					
	2) 栽培作物の被害発生状況解明	調査対象作物数	目標	2	2	2	2	種類
			実績					
	3) 土着天敵温存・増殖植物の植生管理上からの選定および管理技術開発	調査対象植物数	目標	3	3	3	3	種類
			実績					
②	1) 強風地における性フェロモン剤の有効利用技術	調査対象害虫数	目標	2	2	/	/	種類
			実績					
	2) 性フェロモン剤と黄色灯を組み合わせた技術の防除効果の評価	調査対象害虫数	目標	/	2	2	2	種類
			実績	/				

③	1) 予察モデルの秋作/バレイシヨに対応した改良	試験圃場数	目標	3	3	3	3	圃場
			実績					
③	2) 予察モデルと高機能薬剤を組み合わせた減農薬防除技術の評価	試験圃場数	目標	3	3	3	3	圃場
			実績					

1) 参加研究機関等の役割分担

九州大学: 天敵利用に関する指導・助言(前課題の共同研究機関)

サンケイ化学株式会社: 性フェロモン剤利用に関する指導・助言(性フェロモン製剤の開発・販売会社)

2) 予算

研究予算 (千円)	計 (千円)	人件費 (千円)	研究費 (千円)	財源			
				国庫	県債	その他	一財
全体予算	44,964	40,164	4,800				4,800
23年度	11,241	10,041	1,200				1,200
24年度	11,241	10,041	1,200				1,200
25年度	11,241	10,041	1,200				1,200
26年度	11,241	10,041	1,200				1,200

(研究開発の途中で見直した事項)

4 有効性

研究項目	成果指標	目標	実績	H				得られる成果の補足説明等
				23	24	25	26	
①	土着天敵温存・増殖植物の利用技術	1					○	土着天敵温存・増殖植物で活動する天敵類を利用し、環境にやさしい作物栽培が可能となる。
②	性フェロモン剤と黄色灯を組み合わせたチョウ目害虫の防除技術	1					○	大規模露地圃場に適した両技術を組み合わせ、環境にやさしい作物栽培が可能となる。
③	バレイシヨ疫病初発期予察モデルを利用した減農薬防除技術	1					○	第1回目の防除時期を的確に把握し、薬剤の特性を活かした体系防除を実施することにより、減農薬栽培が可能となる。

1) 従来技術・先行技術と比較した新規性、優位性

諫早湾干拓地のような大区画圃場は全国的にも稀であり、本研究のような試験事例および試験実施の可能性はなく、新規性は非常に高い。また、前課題の実用技術開発事業では、バレイシヨ寄生アブラムシの土着天敵、黄色灯利用技術とその効果、春作/バレイシヨにおける疫病初発期予察モデルの適合性について、成果を得ており、本研究においてその成果が利活用できる。

2) 成果の普及

■ 研究成果の社会・経済への還元シナリオ

県央振興局農林部諫早湾干拓事務所を通じ、干拓地営農者へ成果の普及を図る。具体的には、当事務所は干拓営農者で組織する「諫早湾周辺地域環境保全型農業推進協議会」の事務局であり、この協議会の活動の一環として、研修会等を開催し、スムーズな技術導入・定着が可能である。

■ 研究成果による社会・経済への波及効果の見込み

県政の課題である「諫早湾干拓地における環境にやさしい農業の展開」の一翼として、社会・経済への波及効果は非常に高いものと見込まれる。

・経済効果: 施肥技術等を含めた環境に考慮した諫早湾干拓地農産物のブランドが確立すると、その経済効果は計り知れないものとなる。

(研究開発の途中で見直した事項)

種類	自己評価	研究評価委員会
事前	<p>(22年度) 評価結果 (総合評価段階: S)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 : S <p>諫早湾干拓地における営農は環境保全型農業の実践が命題となっているが、1区画6ha という大区画圃場における病害虫防除は多大な労力が必要であり、これを支援する病害虫管理技術の確立が望まれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効率性 : S <p>前課題の成果および知見を活かした課題であり、効率的な試験研究が実施可能である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有効性 : S <p>諫早湾干拓地における環境保全型農業を推進する上で、必要不可欠な技術である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合評価 : S <p>県政の課題である「諫早湾干拓地における環境にやさしい農業の展開」の一翼として、社会・経済への波及効果は非常に高いものと見込まれる。</p>	<p>(22年度) 評価結果 (総合評価段階: A)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 : A <p>諫早湾干拓地での営農確立は、県の重要課題である。しかし大規模露地野菜圃場における環境保全型の病害虫防除技術は、いまだ確立されているとは言えず、入植者の営農安定のためにも必要性が高い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効率性 : A <p>先行研究の成果と課題を踏まえたうえで、大規模ほ場という条件での技術確立を目指す計画となっており、効率性が認められる。実施にあたっては干拓地特有の気象条件や圃場規模などに十分留意して進めて欲しい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有効性 : A <p>これまで県内になかった大規模圃場での環境保全型農業を成立させスケールメリットを得るためには、効率的な総合防除技術が重要なポイントになる。本研究の成果が期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合評価 : A <p>干拓地での環境保全型農業の実現には重要な研究であり、早急な技術組み立てが必要である。防除効果の波及範囲や経済性の点など、技術の普及性を念頭に置いた研究が重要である。</p>
	対応	<p>対応</p> <p>干拓地特有の気象条件、圃場規模などに留意し、技術の普及性を見据えた研究を実施する。</p>
途中	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価 	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 ・有効性 ・総合評価
	対応	対応
事後	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性 	<p>(年度) 評価結果 (総合評価段階:)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要性 ・効率性

<ul style="list-style-type: none">・有効性・総合評価	<ul style="list-style-type: none">・有効性・総合評価
対応	対応

■総合評価の段階

平成20年度以降

(事前評価)

- S=積極的に推進すべきである
- A=概ね妥当である
- B=計画の再検討が必要である
- C=不相当であり採択すべきでない

(途中評価)

- S=計画以上の成果をあげており、継続すべきである
- A=計画どおり進捗しており、継続することは妥当である
- B=研究費の減額も含め、研究計画等の大幅な見直しが必要である
- C=研究を中止すべきである

(事後評価)

- S=計画以上の成果をあげた
- A=概ね計画を達成した
- B=一部に成果があった
- C=成果が認められなかった

平成19年度

(事前評価)

- S=着実に実施すべき研究
- A=問題点を解決し、効果的、効率的な実施が求められる研究
- B=研究内容、計画、推進体制等の見直し求められる研究
- C=不相当であり採択すべきでない

(途中評価)

- S=計画を上回る実績を上げており、今後も着実な推進が適当である
- A=計画達成に向け積極的な推進が必要である
- B=研究計画等の大幅な見直しが必要である
- C=研究費の減額又は停止が適当である

(事後評価)

- S=計画以上の研究の進展があった
- A=計画どおり研究が進展した
- B=計画どおりではなかったが一応の進展があった
- C=十分な進展があったとは言い難い

平成18年度

(事前評価)

- 1:不相当であり採択すべきでない。
- 2:大幅な見直しが必要である。
- 3:一部見直しが必要である。
- 4:概ね適当であり採択してよい。
- 5:適当であり是非採択すべきである。

(途中評価)

- 1:全体的な進捗の遅れ、または今後の成果の可能性も無く、中止すべき。
- 2:一部を除き、進捗遅れや問題点が多く、大幅な見直しが必要である。
- 3:一部の進捗遅れ、または問題点があり、一部見直しが必要である。
- 4:概ね計画どおりであり、このまま推進。
- 5:計画以上の進捗状況であり、このまま推進。

(事後評価)

- 1:計画時の成果が達成できておらず、今後の発展性も見込めない。
- 2:計画時の成果が一部を除き達成できておらず、発展的な課題の検討にあたっては熟慮が必要である。
- 3:計画時の成果が一部達成できておらず、発展的な課題の検討については注意が必要である。
- 4:概ね計画時の成果が得られており、必要であれば発展的課題の検討も可。
- 5:計画時以上の成果が得られており、必要により発展的な課題の推進も可。